American ROCK LYRIC LANDSCAPE

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第14回

ハリー・チェイピン「タクシー」

あるタクシー運転手の人生

Harry Chapin
"Heads & Tales"
Elektra[US]●75023[1972]
→Wounded Bird[US]◎WOU5023

「ジョニー・カーソン」というインタヴュー番組に、二日続けて出演したほど話題になった。雨が降るある日の夜、タクシーの運転手ハリーがひとりの女性を乗せる。サンフランシスコ（アメリカではフリスコと呼ばれることが多い）では夏はほとんど雨が降らないから、きっと冬だろう。その瞬間から昔の思い出が走馬灯のように蘇ってくる。

It was raining hard in 'Frisco
I needed one more fare to make my night
A lady up ahead waved to flag me down
She got in at the light

'make my night' というのは、〝夜を終わらせる〟という意味と、〝いい夜になる〟というニュアンスがある。'fare' は料金なので、もう1回客を乗せたら今晩は終わりだという意味だ。すると、信号のところに立っていたレディーが手を振って車を止めた。この場合の 'flag' とは手のことを指す。

Oh, where you going to my Lady Blue

アメリカはチャンスの国と呼ばれている。'opportunity knocks' という言葉があるが、これはチャンスはドアをノックする、そのときのチャンスをモノにするために努力をしなければならないという意味。この曲はサンフランシスコのタクシー運転手の話だ。作者のハリー・チェイピンは、ごく普通の人を描くことで知られるソングライター。人々が聞いて、自分のことかもしれないと思わせる曲が多い。一時は映画監督をやっており、68年にはオスカーにノミネートされた。そんな経験からか、彼の詩は映画みたいに人々を描いているような気がする。また彼は小さな街で数々のライヴを行ない、ファンベースを掴んだ。81年没。

「タクシー」はシングル・チャートでは24位までしかいかなかったが、FMラジオが盛んだった70年代当時はよくかかった。

It's a shame you ruined your gown in the rain
She just looked out the window
And said, "Sixteen Parkside Lane"

ハリーが彼女に聞く。〝レディー・ブルー、行き先はどこ?〟。'Lady Blue' はいわゆるお世辞。きれいな人を呼ぶようなニュアンスだからだ。〝ガウンを雨でだめにしちゃって残念だね〟。ここでのガウンはパーティー・ドレスのこと。しかし彼女はハリーを無視して、ただ窓から外を見て、行き先を告げる。'Sixteen Parkside Lane' はアメリカの住所で、パークサイド・レインといえば高級住宅街のイメージだ。

Something about her was familiar
I could swear I'd seen her face before
But she said, "I'm sure you're mistaken"
And she didn't say anything more

ハリーは彼女を身近に感じる。どこかで見たことがある顔だと思った。'I could swear' は〝誓ってもいい〟という意味で、彼女をどこかで見たことがあると誓っていい、という感じ。でも彼女は〝あなたは間違えているんじゃない?〟とひとこと言って、それからは何にもしゃべらなかった。

It took a while but she looked in the mirror
And she glanced at the license for my name
A smile seemed to come to her slowly
It was a sad smile just the same

何も言わなかった彼女が、少し時間が経ち、何かを思い出したのだろう。バック・ミラーでタクシー・ライセンスの名前を見て、ゆっくり顔に笑顔が出てきた。昔のことを思い出したんだ。でもその笑顔は寂しい笑顔だった。最後の 'just the same' は、顔は笑顔だったけど、という意味だ。

And she said, "How are you, Harry?"
I said, "How are you Sue?"
Through the too many miles and the too little smiles
I still remember you

彼女は〝ハリー、元気だったの?〟と聞いてきた。ハリーも〝スー、元気なの?〟。'many miles' とは、年齢を重ねてきた、人生で経験をしてきたという意味だ。スマイルは足りなかったけど、つまりあまりいいことはなかったけど、あなたのことは忘れていない、と答えたんだ。

It was somewhere in a fairy tale
I used to take her home in my car
We learned about love in the back of the Dodge
The lesson hadn't gone too far

ここで彼は昔のことをお伽話みたいに思い出す。ハリーの車でよく彼女を家まで送ったことも。'Dodge' という車の後ろで愛を学んだことも。ドッジは大きい車だから、後ろで二人はセックスをしたんだろう。ただ、次の行を読むと、最後まではできなかった感じがする。最後の1行は、レッスンがあまり進まなかったということだ。

You see, she was gonna be an actress
And I was gonna learn to fly

She took off to find the footlights
And I took off to find the sky

‘you see’は、聞いてくれと人に呼びかけるときに使う言葉。彼女は女優になるはずだった。ハリーは飛ぶことを学ぶつもりだった。パイロットになりたかったらしい。彼女はステージ下の‘footlights’を探しに行った、つまり女優を目指していた。そしてハリーは空を探しに行った。

Oh, I've got something inside me
To drive a princess blind
There's a wild man, wizard
He's hiding in me
Illuminating my mind
Oh, I've got something inside me
Not what my life's about
‘Cause I've been letting my outside tide me
Over ’till my time runs out

ここからは夢の世界のように、メロディーもドリーミーになる。そしてハリーがいう。俺はプリンセスたちを目が見えないよ

うにできる。俺の内面には魔法使いが隠れていて、脳に刺激を与えている。俺は何かを持っている。今の俺は本当の俺とは違う。‘tide me’とは、潮の流れからくる言葉で、‘tide you over’といえば、時間がなくなるまでもうひとりの自分にまかせるということ。つまり、死ぬのを待っているだけ、人生をほとんど諦めているようだ。

Baby's so high that she's skying
Yes she's flying but afraid to fall
And I'll tell you why baby's crying
‘Cause she's dying, aren't we all?

‘she's skying’の‘skying’という言葉は造語で、イメージ的な言葉だ。これには、有名な女優になったという意味も含まれている。いくら有名になってお金があっても、いずれみんな死んでしまうといっている。そしてそれは哀しいことだという。

There was not much more for us to talk about
Whatever we had once was gone
So I turned my cab into the driveway

Past the gate and the fine trimmed lawns

ハリーと彼女はもう話すことがなかった。昔ふたりの間にあったものは、もうない。タクシーがゲートを抜けて、きれいに刈られた芝生の前を通って、ドライヴウェイに回り込んだ。

And she said “We must get together”
But I knew it'd never be arranged
And she handed me twenty dollars for a two fifty fare
She said “Harry, keep the change”

彼女に言われた、また会いましょうと。でも二度と会うことはないことを知っていた。タクシー代は2ドル50セントだったが、ハリーは20ドルを差し出され、おつりはいらないと言われた。

Well another man might have been angry
And another man might have been hurt
But another man never would have let her go
I stashed the bill in my shirt

ハリーは自分のなかで、いろんなタイプの男を想像している。俺が違うタイプだったら怒っていたかもしれないし、傷ついたかもしれないし、彼女を逃さなかったかもしれないと、いろんな可能性を考えている。ハリーは受け取った金をシャツに入れた。‘stash’とは隠してしまうことだ。

And she walked away in silence
It's strange how you never know
But we'd both gotten what we'd asked for
Such a long, long time ago

彼女は無言で歩いていった。〝不思議だね。人生はわからないね。お互い昔望んでいた夢が叶ったね〟と、ハリーは独りごつ。

And here she's acting happy
Inside her handsome home
And me I'm flying in my taxi
Taking tips and getting stoned
I go flying so high, when I'm stoned

そして今、彼女は贅沢な家の中で幸せを演じている。ハリーといえば、タクシーの中で飛んでいる。チップをもらいドラッグをキメる、そんな時は凄く高く飛べるんだ。

詩はここで終わる。余韻を残した終わり方だ。人は自分が選んだ道を歩く。どの道が正しいか、正しくないかは誰にもわからない。でも何年か経つと、通り過ぎた道は戻れないことがわかる。途中、ハリーは空を飛びたいといっているが、それはパイロットとしてのことだろう。しかし人生の歯車が狂い、ドラッグで飛ぶだけの人生になってしまったに違いない。アメリカでは夢は自由につかめるが、落とし穴も多い。RC

ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。18歳で新宿2丁目のロック・バー＜開拓地＞で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イヴェントなどのMCでも活躍。
http://whatsupmusicinc.com

TAXI Words by Harry F. Chapin Music by Harry F. Chapin
©Copyright by STORY SONGS, LTD. All rights reserved. Used by permission.
Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC PUBLISHING, INC. 日本音楽著作権協会（出）許諾第1104774-101号